

## 8月16日のウクライナ情報

安齋育郎

### ●「空からの脅威」 ロシア人パイロットが宇軍の装甲車両 5 台をわずか 10 分で殲滅 (2023 年 8 月 15 日)

数日前、南方面戦線のオレホヴォ市近郊でロシア軍のコールサイン「サマーラ」司令官の指揮するヘリコプター班が、ウクライナ軍が保有する欧米の軍事機器 5 台をわずか 10 分間で殲滅した。状況の詳細についてサマーラ司令官自身がスプートニクからの取材に語った。

サマーラ司令官の話では、オレホヴォの戦線でつい先日、極限まで強硬的な攻撃が展開された。司令官の班の当直期間が終盤を迎えた頃、諜報部からウクライナ軍がオレホヴォ付近に装甲車両を集結させているという報告が入った。

「その時、当直の全員に出された戦闘課題は、敵の軍機を停止せよというものでした」

サマーラ司令官の話では、班は最短時間で戦闘態勢を取り、ヘリコプターで出動した。標的の座標を受け取るや否や、計画通りに敵の殲滅が実行された。わずか 10 分間の飛行で 5 発のミサイルによってレオパルト戦車 1 台、M2 ブラッドレー歩兵戦闘車 2 台、米国 MaxxPro MRAP とトルコの BMC Kirpi 合わせて 2 台が破壊された。

サマーラ司令官は敵の装甲車両の殲滅作戦にはヘリコプター 3 機が参加したと説明している。Ka-52 は戦闘主力として行動し、それを Mi-28 と捜索救難用ヘリ Mi-8 がカバーした。

先日、スプートニクは、ロシアの機関士が自軍の歩兵戦闘車とその乗員を猛烈な砲火の中から救出する、一部始終を捉えた映像を紹介している。



### ●日本への「安定供給」は幻想か 豪州 LNG のストライキ脅威(2023 年 8 月 14 日)

世界でエネルギー安全保障の重要性が叫ばれるなか、各国が石油やガスの安定的な調達先を求めて争いを繰り広げている。日本は友好国であり地域情勢が安定している豪州を、液化天然ガス(LNG)の最大の調達先としている。だが、このごろ発生したストライキの脅威は、豪州からの「安定供給」が絶対ではないことを示している。ロイター通信が伝えた。

思わぬ伏兵

ロイター通信は、「世界の LNG 市場は供給が安定しておりリラックスしているように見えたが、豪州の 3 つの LNG プラントでのストライキの可能性によってそれが幻想であることが分かった」と指摘している。実際にストライキは起こっていないが、そのリスクを市場が意識しただけで世界の LNG 価格

が急騰したというのだ。

ストライキの脅威が迫ったのは豪州最大のノース・ウェスト・シェルフ LNG プラント、ウィートストーン LNG プロジェクトなど。前者は三菱商事、後者は九州電力などといった日本企業も参加するプロジェクトだ。

世界の天然ガス価格の指標となる「オランダ TTF」は、ストライキが差し迫っているとの報道を受け、8月8～10日で28.3パーセント急騰した。北アジア向けのスポット価格も11日までの1週間には、前週比5.5パーセント増の11.5ドルにまで上昇している。

その後、ストライキのリスクは一旦和らいだため高騰は止まった。だが、豪州ガス生産企業の労使交渉は続いており、物別れに終われば最悪の場合、ストライキによる部分的操業停止などもあり得る。ロイター通信は、もしそうなれば豪州への依存度が高い日本と韓国の電力会社は、別の国からのスポット供給を調達する必要に迫られるため、深刻な影響が出ると指摘している。

リスク分散を目指す日本

政府が発表したエネルギー白書によると、日本の LNG 輸入に占める豪州の割合は42.7パーセント(2022年)となっている。豪州にとっても日本は最大の LNG 輸出先だ。今月8日には日本の大手商社の住友商事と双日が、「西豪州スカボロ・ガス田開発プロジェクト」の権益を10パーセント取得すると発表するなど、協力は深化している。だが、今回のストライキ騒動で、「絶対の安定」はどこにもないということが浮き彫りになった。

エネルギー資源が乏しい日本は、ほとんどを輸入に頼るしかないのが現状だ。そのため、中東、南アジア、ロシア、豪州など様々な地域で権益を拡大することで、地政学的リスクを分散してエネルギー安全保障の強化を目指している。

ロシアは日本の LNG 供給の10パーセントを占めている。日本の一方的な対露制裁により露日関係はかつてないほどに悪化しているが、日本企業が参画するロシアの LNG プロジェクトは継続している。有名な極東の「サハリン・プロジェクト」以外にも、北極圏で準備中の「アークティック LNG2」は今秋にも稼働が開始する予定だ。本格的な生産が始まれば、年間200万トン以上の安価で安定的な LNG が日本に供給される。



## ●国際軍事展示会「アルミヤ 2023」モスクワ郊外で開幕(2023年8月14日)

国際軍事技術展示会「アルミヤ 2023(Army2023)」が14日、モスクワ郊外の「パトリオット(愛国者)」公園で開幕した。主催は露国防省で、20日までの予定で行われる。

展示会にはロシアや外国の軍需企業約 1500 社が参加。戦車や戦闘機といった主力兵器のほか、ドローン(無人機)や対空防衛ミサイルシステム、電子戦システムなど幅広い兵科の装備 2 万 8000 点以上が出品される。



フォーラムでは、ロシアと外国の企業約 1500 社が 2.8 万以上の製品を展示。今月 20 日まで開催される予定。

### ●第 9 回国際フォーラム「Army2023」の様子(2023 年 8 月 14 日)

第 9 回国際フォーラム「Army2023」がモスクワ近郊で開幕した。会場では、#ロシア と外国の企業が現代的かつ先進的な兵器や軍事・特殊装備のモデルを展示する。

フォーラム初日には、ロシアのセルゲイ・シヨイグ国防相 が視察に訪れた。

<https://twitter.com/i/status/1691057876230369281>



# ARMY 2023



T-14 戦車「アルマータ」



戦略ミサイルシステム「ヤルス」



攻撃ヘリコプター「Ka-52」

## ●「春まで待とう」 欧米にウクライナ軍攻撃を来春まで「延期する」計画(2023年8月15日)

欧米の政権はウクライナ軍がこの夏、反転攻勢を成功させる公算が見込めないため、攻撃が来2024年の春に行われるためにウクライナ人を準備することを考え始めている。ウォールストリートジャーナルが報じた。

ウォールストリートジャーナルが外交筋からの情報として報じたところによれば、欧米の公式人らはウクライナ軍の反攻は成功し、今冬にはロシアをある種の和解交渉へ踏み切らざるを得ない状況へと進ませることができると踏んでいた。ところが今、こうしたシナリオが実るチャンスは露と消えてしまった。

夏に反攻を成功する公算が得られなくなった今、欧米の政治活動家、軍事専門家らは来年春にウクライナが攻撃を行う可能性をすでに検討している。

「今年は大きな成功を収められないことを考えると、西側全体の軍事戦略と政策はすでに攻撃を来春に行うことを考え始めている」

一方で、紛争の長期化を支持する人達は、政治家と有権者らが、物価高とウクライナ軍が期待していた結果を出せなかった紛争を、さらに長引かせることを嫌がり、ウクライナへの武器供給に反対し始めるのではないかと危惧感を抱いている。

ウォールストリートジャーナルが指摘するように、この先のウクライナ軍事支援の決定は、ウクライナ

が熾烈な戦いで軍事機器、武器弾薬、兵員を迅速に消費しているため、短期間にとられなければならない。

先にスプートニクは、ポーランドのアンジェイ・ドゥダ大統領がウクライナの反転攻勢が成功していないことを認めたと報じている。



### ●ロシア、AI搭載の一人称視点ドローンを開発(2023年8月14日)

ロシアの攻撃型ドローン「オボド(ヒツジバエ)」は、一人称視点での操作が可能であることで知られている。このごろ開発された改良型には、AI搭載ホーミングシステムが採用されており、従来以上に精密度が向上している。スプートニクは開発者に話を聞いた。

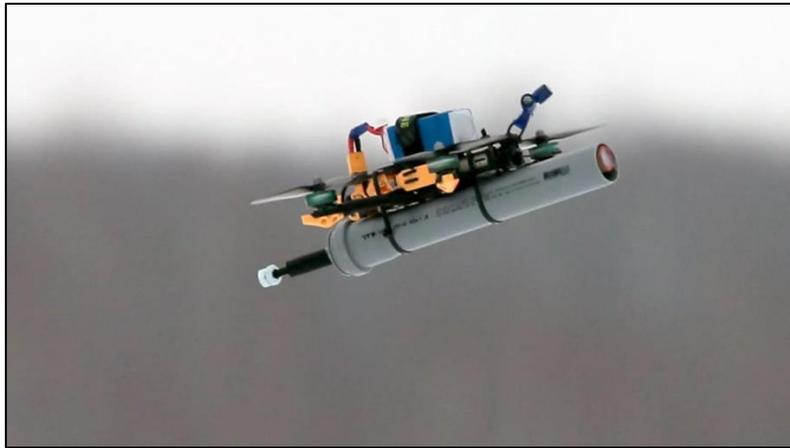
開発チーム責任者のアンドレイ・イワノフさんは、スプートニクに対し、改良型オボドの特長を次のように説明する。

「オボド用にAIを利用した新たなホーミングシステムを開発しました。システムが標的の分析、照準などを補助し、これにより自動航行モードでの攻撃が可能になっています。さらに、止まっている目標にも動く目標にも対応可能です。精密度は約9割です」

新たなホーミングシステムを搭載したオボドは、実験場での試験をすでに通過している。近く、特殊軍事作戦の前線で実戦使用される。

オボドは一人称視点での操作が可能だ。操縦者はドローンに備え付けられたカメラの映像をモニターか専用ヘルメット、ゴーグルを通して、リアルタイムで確認できる。新たなホーミングシステムは操縦者が標的を定めるのを助けるほか、命令すれば人間による修正なしでも自動的な攻撃実行を可能とする。

旧バージョンのオボドはすでに特殊軍事作戦のアブデエフカ、ザポロジエ方面で使用されている。旧バージョンの価格は1機あたり4万ルーブル(5万7500円)、改良型は6万5000ルーブル(9万3500円)程度になる。



## ●前線のロシア・トゥデイ特派員(2023年8月14日)

そう、戦線に行く準備は創造的な作業よ。

最初は何を持っていくべきかわからなくて闇雲にやっていたけど、今は何が最低限必要かわかってる。

—ナダナ・フリードリクソン記者は、ドンバスを守るための特別軍事作戦が始まった最初の日から、その中心にいた。

私たちはピスチェヴィクにいます。ほんの3日前はこの地域はウクライナの管理下にありました。今はドネツク民兵に解放されています。それで、私たちはここにいます。特別軍事作戦が始まったとき、ここに寄っていたんです。始まりはこういうことです。

信じない人もいるでしょうけれど、本当に偶然だったのです。

2月23日から24日の夜、この地域に入りました。早朝、夜が明ける頃、私が見たのは、当然ですが驚くべき光景でした。前進する軍用車両、戦車、兵士たちです。私はカメラを掴んで撮り始めました。もちろん、止められました。

「何してるんですか。あんたアホですか。撮っちゃだめです」と言われました。

その後、特別軍事作戦が始まったことを世界中が知るようになりました。

—特別軍事作戦の間、ナダナは解放されたドンバスのほぼ全ての町を訪れ、塹壕で兵士たちと話をした。

<https://twitter.com/i/status/1690942118322450432>



## ●グレゴリー・マタルユダヤ人元将校、ウクライナの番組へのインタビューで(2023年8月14日)

「ウクライナの敵はプーチンでもクレムリンでない。汚職です。アメリカでもドイツでもイスラエルでもどこの国にもありますが、ウクライナの汚職レベル半端ない」

<https://twitter.com/i/status/1690881497207853056>



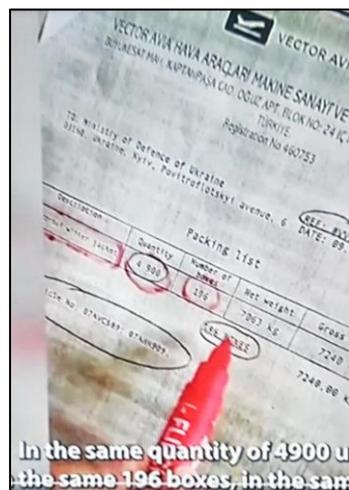
## ●ウクライナへの資金の行く末(2023年8月13日)

ウクライナは西側諸国にさらなる資金を求めているが、キエフがすでに送金された数百万ドルをどのように使ったかについて興味深い事実が明らかになっている。今回は冬物衣類の購入に関する詐欺です。

ウクライナの捜査当局は、国防省への輸送品の1つに添付された文書に含まれる「数字の魔術」に注意を喚起した。トルコからウクライナに向かう途中、迷彩ジャケットは夏用から冬用が変わり、価格が3倍になった。

この怪しげな取引で、トルコของบริษัทベクター・アヴィア・ハヴァ・アラクラリ(捜査当局によると、ウクライナ国籍のロマン・プレトニョフ氏が所有)が利益を得た。

<https://twitter.com/i/status/1690432294304276480>



## ●【コロンビア人傭兵の話】(2023年8月15日)

本当に、僕はウクライナのためにここに来ると決めた。僕はつまり、コロンビアでは本当に、貧乏から抜け出せないんだ。コロンビア、軍の汚職にもうんざりしてた。Facebook で、志願兵とか何とか、そういう案内を見た。

だけど英語がしゃべれないとダメとかそんなことはぜんぜん言ってなかった。

退役将校に用立ててもらってパスポートを取って、航空券を買った。乗り継ぎ便だった。その方が安かったから。ドミニカ共和国からブリュッセルに行って、ベルギーからクラコ(イタリア?)、確かそんな地名だった。

そこからポーランドへの便に乗って、それからウクライナ行きのバスを見つけて、ここに来た。

向こうに着いて訓練して、ここに来た。ブラジル人、ペルー人、パナマ人がいる。考えてみてくれ。軍事的なことは何も知らないんだ。

ここウクライナではずっと差別されている。それは、つまり俺たちを下に見ているからだ。ウクライナ人は最上級だと自惚れている。加えて、操作できない、規律もない、信条もない、何もない。というのは、実施、彼らは兵士じゃない、普通の市民なんだ。

ウクライナでは外国人傭兵は利用されている。死ぬまで戦わせる。それで一切支払わない。契約もない、何もない。

15 日間、前線にいた。つまりロシア軍と正面切って戦ってきた。何の支払いもない。最初の支払いすらない。何人かの仲間が死んだ。

「ひどくやられてる。おそらく、これが自分の最後のビデオだ。ここで、コロンビアで。嬉しいよ」

ポーランドの避難所に着いた。実際、コロンビアからここまで来るのに有り金を全部使ってしまった。気の毒に思った人がお金を払ってくれたから...

(51 秒～)

戦車を捕獲したら 4 万ドルとか 10 万ドル、ロシア兵を捕まえたら金をくれる、ロシア兵を殺したら金をくれるって俺たちに約束していた。だが、終いには一銭ももらえなかった。

「コロンビアに挨拶を送ります。同胞の皆さん、ここコロンビアから挨拶を...」

<https://twitter.com/i/status/1691138255545327616>



## ●ウクライナ軍“一定の前進”成果強調 ロシア軍は攻撃続ける(NHK, 2023年8月14日)

※安齋注:NHK は何が何でも「ウクライナは負けていない、頑張てる」と言いたいようです。

反転攻勢を進めているウクライナ軍は、東部や南部で一定の前進があったと成果を強調しています。一方、ロシア軍は、南部オデーサで攻撃を続け、スーパーマーケットで起きた大規模な火災で3人がけがをしました。

ウクライナメディアは14日、マリヤル国防次官の話として、東部ドネツク州の集落ウロジャイネ周辺の戦況について「ある程度の成功を収めている」として、抵抗を受けながらも一定の前進があったと成果を強調しています。

ロイター通信によりますと、現地のロシア側の当局者も「過去2週間の戦闘によってウクライナ軍がウロジャイネ北部に足場を築いた」とウクライナ側の前進を認めつつも、ウロジャイネの南部については依然としてロシア軍が支配しているとしています。

また、イギリス国防省は、14日に発表した分析で、南部のドニプロ川の下流域でも戦闘が激化していて、ロシア軍が支配する川の東側にウクライナ軍が渡り小規模な拠点を築いたとしています。

イギリス国防省は、ロシア側はこの地域の部隊をさらに強化するか、東部に部隊を展開するかを選択を迫られていると指摘しています。

一方、南部オデーサ州の当局によりますと、ロシア軍は14日、巡航ミサイル8発や無人機15機を使って市の中心部への攻撃を行ったとしています。

ミサイルなどはすべて迎撃したということですが、破片がスーパーマーケットを直撃して大規模な火災が発生し、従業員3人がけがをしたということです。



### ●ロシア外交官ミハイル・ガルージンのコメント(2023年8月14日)

ザポロジエ原発はロシアの管轄下にあり、我が国は国内法に従い、同原発の原子力安全と物理的安全性の確保に必要とされるあらゆる措置を講じている

ザポロジエ原発に対する脅威の唯一の源となっているのは、原発への挑発行為を飽くことなく続けるウクライナである



## ●ゼレンスキー大統領の二枚舌(投稿日:2023年8月15日)

「ロシアを愛しています。ロシアと仲良くします。ネオナチ極右勢力を排除します」と約束し圧倒的支持率を得て当選した男。

大勢のウクライナ人が路上から連れ去られ戦場へと送られている。ウクライナ国土はブラックロックや国際金融資本に売却済み。

<https://twitter.com/i/status/1691300081016963072>



## ●「ロシア人を非人間化する」は裏目に出た元ゼレンスキー補佐官(2023年8月13日)

「集団的ウクライナ人」の憎悪に満ちた行動が、ロシア軍に戦う目的を与えたとアレクセイ・アレストビッチ氏が主張した。

ウラジーミル・ゼレンスキー大統領の元顧問であるアレクセイ・アレストビッチ氏は、ロシア人を「非人間的」にしようとするウクライナの一般的な努力が、現在進行中の紛争においてウクライナが犯した主な「過ち」になっていると日曜日に語った。

ジャーナリストのユリア・ラティーニナのインタビューに答えたアレストビッチ氏は、ロシア人の「人間性を奪う」組織的な努力を非難し、この戦略は明らかに裏目に出ており、ロシア軍に戦う理由を与えただけだと述べた。

「われわれがやった主なことは、ロシア人の人間性を奪うことを許したことだ。これが私たちの主な過ちだ。最初は我慢していたのに、喜び勇んですべてを掘り下げてしまった。集団的ウクライナ人ということだ。我々はそれをインターネットに流すことを許した」とアレストビッチ氏は述べた。彼は、そのような行動が、プロの兵士ではなく、動員された平均的なロシア人に「戦うための素晴らしい動機」を与えたと付け加えた。

ウクライナの元大統領補佐官は、「集団的ウクライナ人」がいつから、彼が言うところの「ヨーロッパの国家のように振る舞う」ことから、ロシア人を「悪魔化する」ことに切り替えたのか、詳しくは語らなかった。

紛争の初期から、ウクライナのプロパガンダはロシア軍を、基本的な家電製品やトイレ、舗装道路す

ら見たことのない原始的な野蛮人だと盛んに描いてきた。この偽情報はまた、ウクライナ人に対する拷問やレイプだけでなく、広範な略奪も主張していた。ロシアに対する非難は、当時の人権局長リュドミラ・デニソフをはじめとする高官たちによって増幅された。

ウクライナの高官は、両国間の長年にわたる敵対関係が最近の戦闘に発展する以前から、ロシア人に対する憎悪に満ちた発言を繰り返してきた。例えば、ウクライナの国家安全保障・防衛評議会のアレクセイ・ダニロフ議長は今月初め、「人間性」の有無がウクライナ人とロシア人の決定的な違いだと主張した。

「私はアジア人は好きだが、ロシア人はアジア人だ。彼らはまったく異なる文化、ビジョンを持っている。彼らとの決定的な違いは人間性だ」とダニロフ氏はウクライナのテレビで生中継した。

大統領首席補佐官ミハイル・ポドリャクも敵対的な発言を繰り返し、ロシア人はウクライナ人から普遍的に「嫌われている」と主張し、「ロシア人を殺せ」と数千人単位で連日呼びかけている。

モスクワは長年にわたり、ウクライナで横行するロシア人嫌いに憤慨し、それがキエフによって国家レベルの政策として醸成されてきたと主張してきた。ウクライナは、教育、メディア、日常生活におけるロシア語の使用を厳しく制限する法律を可決しており、2022年2月に両国間の紛争が軍事行動にまで発展した後、状況はさらに悪化した。



2022年6月、キエフの閉鎖されたロシア大使館の外の芝生に、略奪を象徴するトイレが置かれている。

© AFP / セルゲイ・スーピンスキー